

※下記「文法の確認」の課題を行う。

本文(前回と同内容)

およそ能登守教経の矢先に回る者こそなかりけれ。矢だねのあるほど射尽くして、今日を最後とや思はれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾緘の鎧着て、いかものづくりの太刀抜き、白柄の大長刀の鞘をはづし、左右に持つてなぎ回り給ふに、面を合はする者ぞなき。多くの者ども討たれにけり。新中納言、使者を立てて、

「能登殿、いたう罪な作り給ひそ。さりとてよき敵か。」

とのたまひければ、さては大将軍に組めごさんなれと心得て、打物茎短に取つて、源氏の舟に乗り移り乗り移り、をめき叫んで攻め戦ふ。判官を見知り給はねば、物の具のよき武者をば判官かと目をかけて、馳せ回る。判官も先に心得て、表に立つやうにはしけれども、とかく違ひて能登殿には組まれず。されどもいかがしたりけん、判官の舟に乗り当たつて、あはやと目をかけて飛んでかかるに、判官かなはじと思はれけん、長刀脇にかい挟み、味方の舟の二丈ばかりのいたりにけるに、ゆらりと飛び乗り給ひぬ。能登殿は早業や劣られたりけん、やがて続いても飛び給はず。今はかうと思はれければ、太刀、長刀海へ投げ入れ、甲も脱いで捨てられけり。鎧の草摺かなぐり捨て、胴ばかり着て大童になり、手を広げて立たれたり。およそあたりをはらつてぞ見えたりける。恐ろしなんどもおろかなり。能登殿大音をあげて、

「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下つて、頼朝にあうて、もの一言葉言はんと思ふぞ。寄れや寄れ。」

とのたまへども、寄る者一人もなかりけり。

ここに土佐国の住人、安芸郷を知行しける安芸大領実康が子に、安芸太郎実光とて、三十人が力持つたる大力の剛の者あり。我にちつとも劣らぬ郎等一人、弟の次郎も普通には優れたるしたたか者なり。安芸太郎、能登殿を見奉つて申しけるは、

「いかに猛うましますとも、我ら三人取りついたらんに、たとひ丈十丈の鬼なりとも、などか  
従くぞなき。」

とて、主従三人小舟に乗つて、能登殿の舟に押し並べ、「えい。」と言ひて乗り移り、甲の鏝をかたづけ、太刀を抜いて、一面に討つてかかる。能登殿ちつとも騒ぎ給はず、真つ先に進んだる安芸太郎が郎等を、裾を合はせて、海へどうど蹴入れ給ふ。続いて寄る安芸太郎を、弓手の脇に取つて挟み、弟の次郎をば馬手の脇にかい挟み、ひと絞め絞めて、

「いざうれ、さらばおのれら死出の山の供せよ。」

とて、生年二十六にて海へつとぞ入り給ふ。

新中納言、

「見るべきほどのことは見つ。今は自害せん。」

とて、めのと子の伊賀平内左衛門家長を召して、

「いかに、約束は違ふまじきか。」

とのたまへば、

「子細にや及び候ふ。」

と、中納言に鎧二領着せ奉り、わが身も鎧二領着て、手を取り組んで海へぞ入りにける。これを見て、侍どもも二十余人おくれ奉らじと、手に手を取り組んで、一所に沈みけり。その中に、越中次郎兵衛・上総五郎兵衛・悪七兵衛・飛驒四郎兵衛は、何としてか逃れたりけん、そこをもまた落ちにけり。海上には赤旗、赤印投げ捨て、かなぐり捨てたりければ、竜田川の紅葉葉を嵐の吹き散らしたるがごとし。汀に寄する白波も、薄紅にぞなりにける。主もなきむなしき舟は、潮に引かれ、風に従つて、いづくを指すともなく揺られ行くこそ悲しけれ。

## 現代語訳（前回と同内容）

全く（誰一人として）能登守教経の矢の正面に立ちはだかる者はいなかった。（教経は）矢数のある限りを射尽くして、今日を最後とお思いになったのであろうか、赤地の錦の鎧直垂の上に、唐綾緘の鎧を着て、外装を豪華に作った大太刀を抜き、白木の柄の大長刀の鞘をはずし、左右（の手）に持って（敵を）横に払って切り回しなされると、面と向かって相手になる者はいない。（源氏側の）多くの者たちが討たれてしまった。（それを見て）新中納言（知盛）が、使者を遣わして、「能登殿、あんまり罪をお作りなさいますな。そんなことをしたとて（あなたが今相手にしている者は）りっぱな敵というわけではありませんまい。」

とおっしゃったので、（能登殿は）それでは大將軍と組み打ちせよと言うのだなと心得て、大刀・長刀の柄を短めに持って、源氏の舟に乗り移り乗り移りしながら、大声でわめき叫んで攻め戦う。（しかし）判官（義経）の顔を見知っていらっしやらないので、鎧や甲のりっぱな武者を判官かと目をつけて、（舟から舟へと）駆け回る。判官も前から（それを）心得ているので、（能登殿の）正面に立つようには見せかけているが、あれやこれやと行き違うようにして能登殿とはお組みにならない。それでもどうしたことであろうか、（能登殿は）判官の舟にうまく乗り合わせて、それと（判官）目掛けて飛びかかると、判官はかなうまいと思われたのであろうか、長刀を脇に挟み、味方の舟で二丈ほど離れていた舟に、ひらりと飛び乗りなされた。能登殿は早業では（判官に）劣っておられたのだろうか、すぐに続いてもお飛びにならない。（能登殿は）今はもうこれまでとお思いになったので、太刀・長刀を海へ投げ入れ、甲も脱いでお捨てになった。鎧の草摺をかなぐり捨て、胴だけを着てざんばら髪になり、大手を広げて立っておられる。（その姿は）およそ他を圧倒するような威勢で人を寄せつけないように見えた。恐ろしいなどという言葉ではとても言い尽くすことはできない。能登殿は大声をあげて、

「我こそはと思う者どもは、近寄ってこの教経に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下って、頼朝に会って、一言言おうと思うのだ。寄ってこい寄ってこい。」

とおっしゃるけれども、近寄る者は一人もいなかった。

さて土佐国の住人で、安芸郷を支配していた安芸大領実康の子に、安芸太郎実光といって、三十人力を持った大力の剛勇の者がいた。自分に少しも劣らない（大力の）家来を一人（連れ）、弟の次郎も人並み優れた豪傑である。（その）安芸太郎が、能登殿を見申し上げて申したことは、

「どんなに勇猛でいらっしやっても、我ら三人が組みついたならば、たとえ身のたけ十丈の鬼であろうとも、どうして屈服させられないことがあるか（きつと屈服させられるはずだ）。」

と言って、主従三人が小舟に乗って、能登殿の舟に（自分たちの舟を）押し並べて、「えい。」と言って乗り移り、甲の鐙を傾け、太刀を抜いて、（三人で）そろって打ってかかる。（しかし）能登殿は少しもお騒ぎにならず、真っ先に進んだ安芸太郎の家来を、体を近寄せて、海へどつと蹴り入れなされる。続いて寄ってくる安芸太郎を、左手の脇に取って挟み、弟の次郎を右手の脇に挟んで、一絞め絞め上げて、

「さあ、おまえたち、それではおまえたちは死出の山の供をしろ。」

と言って、生年二十六歳で海へさっとお入りになった。

新中納言（知盛）は、

「見届けねばならないようなことは（全て）見届けた。今は自害しよう。」

と言って、めの子の伊賀平内左衛門家長を召して、

「おい、（死ぬ時はいっしょにとごう）約束を違えるつもりはあるまいな。」

とおっしゃると、(家長は)

「あれこれ申すまでもございません。」

と、新中納言に鎧を二領お着せ申し上げ、自分も鎧を二領着て、手を取り組んで海に入ってしまった。これを見て、武士たち二十余人が(主君に)死に後れ申すまいと、手に手を取り組んで、同じ所に沈んだ。(しかし)その中で、越中次郎兵衛・上総五郎兵衛・悪七兵衛・飛驒四郎兵衛は、どのようにして逃れたのだろうか、そこもまた落ち延びてしまった。海上には(平家の)赤旗や、赤印が投げ捨てられ、放り出されていたので、(まるで)竜田川の紅葉の葉を嵐が吹き散らしたようである。波打ち際に打ち寄せる白波も、薄紅になってしまった。主人のいない空っぽの舟は、潮に引かれ、風の吹くのに任せて、どこを指すともなく揺られて行くのは悲しいことであった。

### ○文法の確認

上記本文から傍線部が引かれた十箇所を抜き出してノートに書き写し、動詞・助動詞について授業と同様の文法的説明を行う。各自調べて学習を進める。

例

安芸郷 を サ変用 過去体  
知行し ける

※ 「給ふ」など敬語が含まれる場合は、種類(尊敬・謙讓・丁寧)と誰から誰への敬意かも確認すること。

### ○前回課題の解答・解説

#### 1 内容の整理

- ①知盛(新中納言) ②大將軍 ③義経(判官)
- ④生け捕り ⑤死出の山 ⑥めもの子
- ⑦鎧二領 ⑧自害 ⑨赤旗 ⑩紅葉葉

#### 2 基本

- 1 (1)すぐに。 (2)お呼びになる。 (3)死に後れる。
- 2 (1)叫び (2)乗り当たり (3)続き (4)猛く
- 3 (1)過去の原因推量・連体(形)
- (2)婉曲・連体(形)
- (3)仮定・連体(形)
- (4)打消意志・終止(形)

【解説】(3)「取りついたら」という意味。

#### 4 (1)あまり罪をお作りなさるな。

(2)どうして屈服させられないことがあるのか。(いや、屈服させることができない。)

【解説】(1)「な…そ」は穏やかな禁止を表す。「いたう」は「いたく」のウ音便で、打消表現(二)

ここでは禁止」と呼応して、「あまり（…するな）」の意になる。(2)「なか」は「どうして…か」の意で、ここでは反語を表す。「従へ」は下二段動詞「従ふ」の未然形で、「従える・屈服させる」の意の他動詞である。「べき(べし)」は可能を表す。

### 3 読解

#### 1 教経に立ち向かう敵がないと「つ」と。

【解説】冒頭の一文「およそ能登守教経の矢先に回る者こそなかりけれ。」と照応する表現。教経の気迫に圧倒され、弓矢の前にも、また太刀・長刀の前にも、戦いを挑んでくる敵はいないのである。

#### 2 (1)イ

(2)討ち取るなら身分の高い敵をねらえという意味。(大將軍と組み打ちせよという意味。)

【解説】知盛の言葉にある「罪」とは、ここでは人を殺すことである。既に平家の負け戦であると自覚している知盛は、これ以上、無益な殺生はするなど言ったのである。それに今戦っている相手はたいした身分の者でもないだろう、と付け加えた。知盛は「そういう者を殺しても無意味だから、もうやめる。」というつもりだったのだが、教経は「どうせならばもつと身分の高い者を討ち取れ。」ということだと受け取ったのである。

#### 3 エ

【解説】義経は教経の戦いぶりを見て、まともに戦ってはかなわないと思っていたが、「大將軍」という立場上、最初から逃げ回るわけにもいかず、いかにも教経の正面に回るようにしながら、うまく入れ違うように動き、教経との勝負を避けていたのである。

#### 4 判官かなはじとや思はれけん(十三字)〔六四・3〕

【解説】「長刀脇に…飛び乗り給ひぬ。」「六四・3」という行動に対し、作者がその理由を「義経は(教経に)かなわないとお思になったからだろうか」と推測している。この前後に見られる、「されどもいかがしたりけん」〔六四・1〕、「能登殿は早業や劣られたりけん」〔六四・5〕も同様の挿入句である。

#### 5 最後〔六三・2〕

【解説】「今はかう」とは、「今はこれまで。もはや最後だ。」という意味。ここでは、戦い続けるのも限界に來たと教経が思ったということである。

#### 6 教経の様子が、他を圧倒する勢いであまりに恐ろしかったから。

【解説】「寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。」「六四・10」という教経の挑発に応じる者は一人もいなかったということ。「寄れや寄せ」という掛け声とは裏腹に、死を覚悟した教経の気迫は、敵を圧倒して寄せつけなかった。それは源氏の武士にとって「恐ろしなんどもおろかなり。」と感ぜられるものだった。

#### 7 死ぬ時はいっしょである、という約束。

【解説】この後の知盛と家長の行動こそが、「約束」の実行にあたる。家長は知盛に鎧二領を着せ、自らも鎧二領を身に着けて、知盛と手と手を取り組んで海に入ったのである。「めのと子」は従者であると同時に兄弟のような存在でもあり、運命を共にする約束をしていたのである。

#### 8 壇の浦

【解説】「落ちにけり。」とは、戦場を逃れ、落ち延びていったという意味。

#### 9 平家の赤旗・赤印が海上に乱雑にうち捨てられて漂っている様子。

【解説】「紅葉葉」は、赤という色彩を強く印象づける言葉であり、赤の比喻として用いられる。また、「嵐」が「吹き散らした」ようだという言い方に、戦闘の激しさ、そして敗北した平家のみじめさも暗に示されているようである。

10 (1)エ (2)ア

【解説】(1)教経は、弓矢・太刀・長刀を駆使して敵を大いに圧倒するとともに、覚悟を決めて自決する際にも敵を道連れにするなど、猛々しい武士として描かれている。(2)知盛は、戦闘の行方を見極め、教経に殺生をやめるよう忠告する姿や、「見るべきほどのことは見つ。」「六六・8」と、達観して静かに入水していく姿に、沈着冷静な人物像がうかがえる。